

イキイキ 現場レポート

社会医療法人 喜悦会 那珂川病院

〒811-1345 福岡市南区向新町2丁目17-17 TEL 092-565-3531 FAX 092-566-6460
http://www.nakagawa-hp.com/

ちょっと変わった連携～医療と他業種との連携を～

「れんけい」と聞くと、医療従事者であれば「病病連携」「病診連携」「医介連携」「組織内連携」がまず思い浮かぶのではないのでしょうか。今回、取材した那珂川病院のフットケア外来は上記のどれとも違う「連携」に取り組んでいます。そんなちょっと変わった「連携」を取材しました。



診察中の竹内一馬血管外科部長

那珂川病院のフットケア外来とは

福岡県福岡市南区にある那珂川病院には「フットケア外来」、「フットケア看護外来」を開設し、フットケアに注力している医師がいます。血管外科部長の竹内一馬医師です。

先生が担当するフットケア外来は予約でいっぱいになっており、患者も福岡県内に留まらず、九州各地から訪れています。

フットケア外来は、多くの場合が糖尿病患者を対象としていますが、那珂川病院のフットケア外来は糖尿病疾患の有無にかかわらず、例えば、むくみや巻爪、外反母趾など、「足」のことで不調があれば何でも診る、というスタイルを開設当初から

貫いています。そもそもなぜ、竹内医師はこのような外来開設に至ったのでしょうか。そして、なぜ予約が後を絶たない外来となっているのでしょうか。

なければ作ってしまおう!!

血管外科部長である竹内医師ですが、元々は循環器内科医であり、内科認定医・循環器専門医を取得後、血管外科や足病診療を専門としていらっしゃる経歴があります。

「循環器内科の時代はもちろん糖尿病の患者さんも多く担当していましたし、外科医となつてからは、閉塞性動脈硬化症の患者の手術も行っていました。その際に、目から一番遠くの

ある足になかなか気を配れず、靴擦れや小さな傷から壊疽に至り、足を切断せざるを得ない症例を多く診てきました。悪化する前にこのような些細な足の傷や靴に関する指導を行う医療機関を紹介したいと思っても、当時はそのような医療機関が見当たらない現状がありました。そこで、なければ私が開設しようと思ったのがきっかけですね」と当時を振り返ります。

フットケア外来開設後、思いもよらぬ反響がありました。それは、これまでどこの診療科を受診してよいのかわからなかったと口々にいう患者が集まってきたのです。

例えば、巻爪は一部自由診療とはいえ、病院で痛みもなく治療できること、むくみもフットサロンのような場所でマッサージをしてもらうのではなく、病院で診察してもらえ、医学的見地からアドバイスしてもらえることなど、患者は知らなかったのです。また、これまで手術しか痛みを取る方法はないと諦めていた外反母趾の患者にとっても、新しい出会いでした。それは、インソールを処方してもらい、自分の足にあった靴を選ぶことによって、根治には至りませんが、痛みが軽減され歩く苦痛から解放されるということ。今まで「たかが足だから・・・」、「命に別状はないし・・・」と、自分なりの諦める理由をつけて納得させていた患者が竹内医師の元へ次々に集まってきました。求められている医療がそこにはあったのです。

「足フェチ会」からNPO法人へ

フットケアは、医療的治療だけでは完結しない場合が多々あります。例えば、毎日履く靴で



市民公開講座を終えたNPO法人足もと健康サポートねっとのメンバー

す。いくら治療を行っても、自分に合っていない靴を履くと、結局は悪化してしまいます。

そこで、靴屋との連携を考えました。その第一歩は、インターネット検索からでした。デザイン性だけではなく、「足に良い靴」を売っている靴屋があるはずだと検索したところ、「ドイツ健康靴(コンフォートシューズ)」を販売しているシューズクラトミの倉富英史氏を見つけます。すぐさま電話連絡し、「医師」と「靴屋」とで連携をしないかと提案し、1つの繋がりができました。

また、ある時は自身も義足のエンドユーザーで婦人靴屋のオーナーをしている吉田恵氏のお店へ直接出向き、声かけを行うなど竹内医師の行動力には目を見張るものがあります。

次は義肢装具士です。良い靴はインソールがあって完成します。医師の処方通り、患者にあったインソールを作ってくれる確かな腕を持つ人が必要でした。そんな時に出会ったのが、有園義肢株式会社(熊本県)の専務取締役でもある有園泰弘氏でした。有園氏は先生の外来診察時には隣に待機し、インソールの処方があると、患者にあったインソール作製のための計測、作製を一手に引き受けています。



インソール作製のため足を計測している有園泰弘氏

そして、最後に医療分野からの同志は、やはり看護師です。嘉数佳代子看護主任は4名の看護師とともに診療のサポートだけでなく、フットケア看護外来を担当し、医師にはなかなか言い出せない些細な患者の想いに寄り添い、看護師だからこそできるケアに努めています。

インターネットでの靴屋探しから始まった連携の輪は次第に大きくなり、当初、足に真剣に向き合う会ということで「足フェチ会」とされていた会ですが、現在はNPO法人「足もと健康サポートねっと」として、市民公開講座等も開けるほどの団体へと成長を遂げました。

福岡が今、熱い!

「足もと健康サポートねっと」でつながった医療・靴屋・義肢装具士・フットサロンの連携は活発です。例えば、シューズクラトミへ靴を買いにきた外反母趾の方がいれば、靴も提案をしますが、竹内医師に診てもらい、インソールを処方してもらってはどうかと、これまでになかった高度な提案が可能となっています。病院に来た患者には、必要であればインソールを

処方し、このような靴屋もあると提案できます。

思ってもいなかった連携プレーに驚く患者もいるそうですが、それ以上に業種の垣根を越えたサポートに安心感を覚える患者の方が多いそうです。

「足もと健康サポートねっと」では、情報の共有、知識の向上、活発な意見交換のために、毎月1回、居酒屋にプロジェクターやiPadを持ち込んで会議を行っています。

「意見を出しやすくするために居酒屋を利用していますが、会議終了までは一切、食事のオーダーはなしです。仕事終わりでいっくらお腹がすいていようとね」と竹内医師は笑って話します。

この連携は今、「福岡モデル」として全国から注目され、高知県や横浜市にも波及しています。

竹内医師は「たかが足と言われます。しかし、足は家で例えるなら土台です。土台がしっかりしなければ、転倒しやすくなったり、あるいは、出歩かずに籠りきりになったりと、様々な弊害を及ぼします。高齢者が増えていく中で、もっと、足に関心をもってもらいたいです。そして、当初の目標でもある足を切断する方を1人でも多く減らす。これに向かって進んでいきたいです」と話しています。

NPO法人の立ち上げ、学会、市民講座と大きなイベントを次々に成功させている竹内医師ですが、その始まりは、「困っている患者を助けたい」というシンプルなものでした。しかし、そこにこそ患者のニーズ(SOS)があり、そのニーズに真摯に向き合った結果、業種を超えた連携の輪が広がり、行き場を失っていた患者の頼り所となっていったのだと思います。(原田 有理)